

那賀川堤防の水神社を考える



エスシー企画(株)

山本秀樹 (Yamamoto Hideki)

技術士 (建設部門)

はじめに

那賀川下流部には洪水で流出する土砂が堆積した洪積平野が広がっている。延喜年間(900年頃)は現在の平野部のほとんどは海底だったが、徐々に土砂の堆積が進み、室町時代の初期(1400年頃)には流路が固定されはじめ、低湿地が水田へと変貌し始めた。室町時代の末期(1580年頃)には北東方向に流れていた流路が東に向かって直流するようになり、現在の那賀川の本流が形成された。治水事業は元禄年間(1690年頃)より始まり、北岸では「万代堤」が、南岸では「黒土手」や「豊年堤」が築かれ、その後、両岸において霞堤による築堤が進んでいった。住民は川水を引いて穀倉地帯を拡大していったが、洪水は相変わらず氾濫し、田畑はもとより堤防や堰等にも被害を与え、それを修復するという繰り返しであった。人々を苦しめ恐れさせる洪水に対し、沿川住民は要所に水神を祀ってその怒りを静め、加護を願うしか方法がなかった。那賀川で堅牢な堤防が概成したのは戦後の昭和23年、農業用水路は南岸用水が昭和29年、北岸用水は昭和30年の完成と近年になってである。現在でも各地の地形、地名、伝承、水神社などから、かつての流路や氾濫の跡、堤防構築や用水開削の苦心を忍ぶことができる。そこで、今回は那賀川下流における洪水遺産ともいえるべき水神社を取り上げ、歴史探訪を兼ねながらその意義を考えてみたい。



阿波国古図(1771年)、阿波国全図(1870年)等より旧河道を推定

図-1 那賀川の成り立ち(出典:小川豊「那賀川の旧河道」)

那賀川の堤防上には驚くほど多数の水神社がある。水神社は洪水氾濫によって家屋や田畑に被害が起きないように水の神様を鎮めたり、かんがい用水の安定的確保や水上交通の安全などを願って建立されたものである。これは、那賀川において早くから堤防や用水路が造られていたことや、舟運が重要な交通手段だったことを裏付けるもので、沿川住民の水に対する祈りや信仰心が強かったことを物語っている。一方、吉野川の堤防沿いには水神社がほとんど見当たらない。代わりに下流域には高地蔵が数多く建立されている。高地蔵は洪水氾濫でお地蔵様が浸水したり流されることがないように高い台座の上に安置されている。銘文は「三界萬霊」が多く、無縁仏を供養する文言であることから、水害から救われたいとする民衆の強い願いが込められたものといえる。吉野川も頻繁に洪水氾濫は繰り返されていたが、近年まで洪水を防ぐ堤防や稲作のためのかんがい用水が建設されていなかった、という大きな違いが見てとれる。

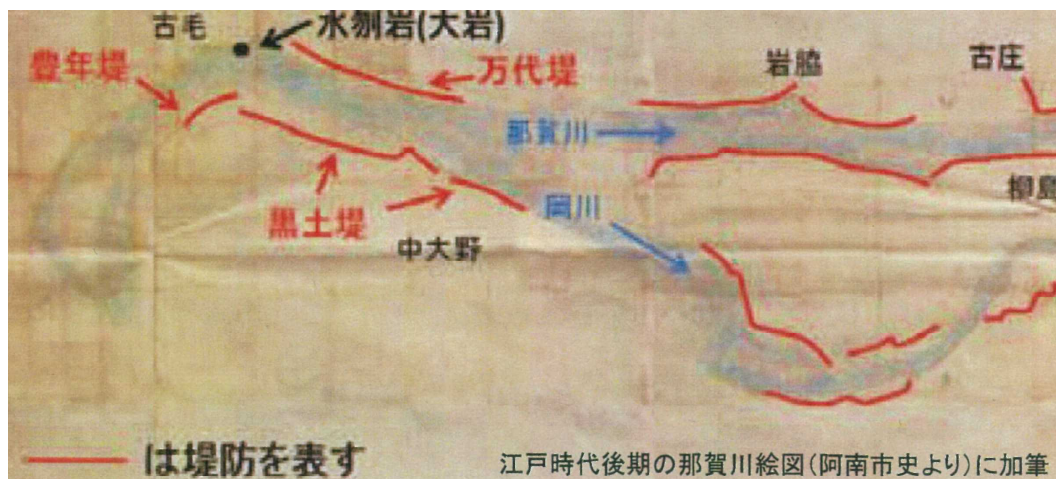


図-2 藩政期の治水事業 (出典：国交省那賀川河川事務所 FLOW2019)

江戸時代、阿波を治めた蜂須賀家は、吉野川流域では藍作を、那賀川流域では米作を推奨してきた。吉野川では堤防を作り用水を引いて米を作るには技術的にも予算的にも困難すぎたため、洪水氾濫を前提とした藍作が適していた。かたや那賀川流域では、堤防や用水路の整備が進められた結果、米の生産量は阿波全体の三分の一を占めるまでになった。那賀川下流域が穀倉地帯として早くから発展してきた背景には、地域の庄屋や豪農が堤防や用水の築造を率先し、その予算や労力も彼らが負担してきたことを忘れてはならない。藩は許可を与え技術指導を行ったが、財政面での支援はほとんどせず、まして利害関係者との調整などは全て地元任せであった。そして、もし事業に失敗すれば普請を担った庄屋等に全ての責任を負わせたため、決死の覚悟で血のにじむような労苦の末に事業をやり遂げても、先駆者は命を犠牲にし逼塞するという結果になった。しかも、米の生産量が増えてもその分だけ農民の年貢も増え、用水や堤防の維持管理もしなければならず、民百姓の負担は軽減されることはなかった。藩の財政が豊かになっても、民百姓は労苦から逃れられず、厳しい暮らしだったため、水神社や高地蔵は、「苦しみから逃れたい、救われたい。」との強い願いが込められた信仰の象徴だったのである。



図－3 那賀川堤防上の水神社の位置図

1 那賀川北岸堤防

①岩脇の水神社

県道 130 号大林津乃峰線（旧国道 55 号線）の那賀川橋から約 250m 上流の旧堤防上（阿南市羽ノ浦町岩脇姥ヶ原）にある。この場所にはかつて那東川とか内川と呼ばれた那賀川の旧河道が流入していて、それを利用して那賀川の水を引き込んで稲作が行われていた。取水口は洪水でたびたび壊れたため、徳島藩は庄屋の佐藤良左衛門に修築工事を命じた。しかし、何度やっても洪水で堰口が壊れたため、遂に自分の娘を人柱にするしか方法がなくなった。いよいよ人柱の娘が埋められようとしたとき、藩主から書状と身代わりの仏像（観世音）が届けられた。工事関係者は祈りを込めて 1,080 個の石に梵字を刻み、仏像とともに堰口に埋めたのである。これにより大井手堰は無事完成させることができた。取水口の真上には水神さんが建てられ、堰の守護神になったという。

祭神は「水速女命」でかんがい用水の神様である。立派な鳥居と御神木の奥に玉垣を巡らせた祠がある。建立年は佐藤良左衛門が大井手堰を築いた延宝 2 年（1674 年）頃とか、それ以前からあったとも云われている。昭和 30 年（1955 年）、約 3 km 上流の羽ノ浦町古毛地先に国営事業で那賀川北岸用水の取水堰が完成し、大井手堰は役割を終えた。水神社の隣には大井手堰趾という石碑が建立され、大井手堰の記録が刻ま



写真－1 岩脇の水神社

れている。取水口周辺は堤防が直線化された際に埋め立てられ、公園になっている。

岩脇から古庄にかけては、かつて那賀川上流の木材が筏師によって運ばれ、製材して県内や阪神方面に送られていた。また、上下流の様々な物資の集積場、川漁師の漁場などとして賑わっていた。そのため、河川を生業の場とする人々がその安全を願って「水神祭」を盛り上げてきた。岩脇の水神さんは古庄の水神さんと姉妹とされ、毎年 8 月 16 日には同時に水神祭りが行われ盛大な花火が打ち上げられるが、こちらが姉なので先に花火を打ち上げる決まりになっている。

②古庄の水神社

那賀川橋から約 100 m 下流の堤防上（阿南市羽ノ浦町古庄古野神）にある。もとは古庄大坪原にあった古庄用水の取水口付近で用水の守り神であったが、取水口が大井手用水に繋がったため、対岸の中原との「渡し」の守り神として船着き場近くに移転した。その後、那賀川での本格的な堤防工事に伴って現在の堤防上に再移転したと云われる。なお、渡しは「岡田式」と呼ばれ、両岸にワイヤーを張り移動する方式で、水神社の堤防下には船着き場が復元されている。



写真-2 岡田式渡船の乗り場跡



写真-3 古庄の水神社

本殿の屋根は前部に反りを持たせた「流造り」の様式を模して作られ、脇には柳の大木がある。主祭神は「水速女命」みずほのめのみことでかんがい用水の神様であるが、竜神、堅牢地神も併せて祀り、灯籠の 4 面にはそれぞれ金比羅神社、水神社、八幡神社、天照大神宮の名がある。近年は主に水上安全の神様としてあがめられていたが、地元民は祭神が誰かなどにはこだわらず、単に水神さんと呼んで崇拝している。古庄の水神さんは岩脇の水神さんの分霊で妹といわれ、毎年 8 月 16 日には岩脇の水神さんと一緒に水神祭が開催され、大仕掛けの花火で賑わっている。

③岩脇西園の水神社

那賀川橋から約 600 m 上流の堤防上（阿南市羽ノ浦町岩脇西園）にあり、すぐ隣に那賀川漁連の事務所がある。那賀川の豊富な水は農業だけでなく、漁業や周辺の工場にとっても重要な水資源であり、豊富な水をたたえることを願って平成 8 年(1996 年)に新しく建てられたものである。水神社や鳥居はすべて真新しい御影石でできており、那賀川の内水面漁業者や工業用水を利用する事業所の守り神となっている。



写真－４ 岩脇西園の水神社

④明見の水神社

那賀川橋から約 2.3 km 上流の堤防上（阿南市羽ノ浦町明見）にある。その昔、明見の北側には古い那賀川が細々と流れていて、出水時には明見は島になっていたといわれる。近年まで明見は対岸の大野村に所属していたが、昭和 29 年（1954 年）に羽ノ浦町に編入された。

水神さんが鎮座している堤防は那賀川において最も古くに築造され、「万代堤」と呼ばれている。天明 8 年（1788 年）、藩の命令により吉田



写真－５ 明見の水神社

宅兵衛（3 代目）が私財を投じて築堤工事に着手して以来、明治 5 年（1872 年）まで数十回にわたって修築、改修されてきたとの記録がある。しかし、水神さんは堤防の安全を祈願したものでなく、八貫の渡しの安全を祈願したものである。もとは渡しの船着き場にあったが、堤防工事に伴い現在の堤防上に移転したといわれる。水神さんの祠は風雨に晒されても大丈夫な瓦質であり、右面には竹、左面には松が描かれていて、「上大野の水神さん」と全く同じ様式である。

明見と対岸の下大野とを結ぶ「八貫の渡し」は旧土佐街道のルートで、渡しは昭和 45 年（1970 年）頃までであった。桑野・長池方面から三倉越えをして下大野に出て、八貫の渡しから明見を通過して古毛越えするのが立江・小松島・徳島方面への最短ルートであった。この場所には那賀川上流から運ばれてくる産物に課税する検閲所があって、藩に 8 貫匁の運用金を納めて「渡し」の権利を得たため、この名がついたといわれる。



写真－６ 八貫の渡し跡

八貫の渡しの南岸側堤防（阿南市下大野町渡り上り）にも「八貫の水神社（下大野の水神社）」がある。

⑤古毛の水神社

那賀川橋から約 3.5 km 上流に行くと堤防は山付きとなり、那賀川北岸用水の取水口がある。取水口から県道を挟んだ広場の奥（阿南市羽ノ浦町古毛小谷口）に水神碑が祀られている。もとはこの上流約 400m の^{のぞきいし}覗石という場所の道路上に、川に向かって建っていたらしい。ここは那賀川の本流が持井橋付近から断崖に向かって激突する場所で、「覗石」と呼ばれる大岩があり、筏や川船がたびたび当たって遭難する



写真－7 古毛の水神社

難所であった。そのため、筏師や船頭が水上安全を祈って水神さんを勧進したといわれる。その後、覗石は爆破されたが、碑は路上で傾いたままだったため、古毛の有志が 300m 程下流の旧広瀬用水取水口があった県道沿い（後に北岸用水碑が隣に建立される）に移転させた。その際、祈念に鳥居を建てたとされ、鳥居に刻まれた「昭和 4 年(1929 年)建之」は、水神碑を移転した年であろう。その後、さらに 100 m 程下流の現在地に再移転しているが、鳥居と手洗鉢には当時の寄進者名がそのまま残っている。台座の上には石碑が安置されていて祠はない。「大綿津神」「速秋津日子神」と 2 柱の水神の名が刻まれ、裏には天保 9 年(1838 年)とある。「大綿津見神」は海を司る神で、「速秋津日子神」は港を司る神といわれる。昔の港は河口にあって潮の干満で速い流れになるため、水流が激突し速い流れの覗石にこの二神が祀られたと推測される。水神さんには注連縄が飾られ、神主が拝む以外に特別な行事は行われていない。

また、水神碑の左側にある祠には琵琶を抱えた石仏（弁財天）が古毛村と彫られた台座の上に安置されている。その昔、決壊した万代堤の修復に労役した囚人が病気になり、助かる見込みがないため人柱にされたのを哀れみ、地元民が供養したものと伝わる。^{ぼんだいづつみ}「万代堤」というのは、この場所から下流に向かい那賀川で最も古くに築造された堤防である。天明 8 年(1788 年)に完成し、延長 594 間(約 1070 m)、堤幅 24 間(約 45 m)、堤高 4 間(約 7 m)は、当時の阿波で最大規模だったとされる。水神社の手前右隣には、堤防工事に尽力した古毛の組頭吉田宅兵衛の功德と堤防の安全を祈念した石碑が建立されている。



写真－8 現在の万代堤

⑥持井の水神社

県道 22 号阿南勝浦線の持井橋北詰交差点から約 100 m 上流の県道 28 号阿南小松島線の道路脇にある。もとは 100 m 程上流にあった持井の渡し場を見下ろす県道の崖の上にあっ

たが、道路工事によって現在の場所に移転している。持井は対岸の上大野町に属し、渡し船で往来していたが、1973年（昭和48年）に持井橋が完成して渡しは廃止された。



写真－9 持井の渡し跡



写真－10 持井の水神社

水神社に玉垣や鳥居はなく、全く同じ祠が2つ並んでいる。ひとつは山神であるが、どちらが水神なのかは不明らしい。手洗鉢は船の形をした独特のもので、舟運の安全を祈願していたことがわかる。持井地区の数戸が水神社のお祀りをしていて、現在は山神を祀る西村家が榊をお供えしている。現場は道路拡張工事が進められていて、水神社は再移転する予定である。

⑦西原の水神社

県道27号阿南那賀川線の大京原橋の約800m上流の堤防下（阿南市那賀川町西原）にある。昔は堤防の川側法面の下にあったが、河川改修により新しい堤防が堤内側にできた際、現在の位置に移された。水神さんの左右には杉と桜の木が植えられ、その隙間には笹が茂っている。鳥居はなく、水神さんの祠の左側に不動明王など3体の石仏が並んで安置されている。昔は8月16日の夜、浪曲や音頭で賑わったらしいが、今は注連縄を取り替えている以外、特別な行事は行われていない。



写真－11 西原の水神社

なお、この下流約100mの堤防下にはお地蔵様があるが、「三界萬霊」とあるので無縁仏をお祀りしたものであろう。

⑧大京原の水神社

大京原橋の約300m上流の堤防下（阿南市那賀川町大京原）にある。堤防敷地と那賀川北岸用水とに挟まれた場所にある。鳥居はなく、脇に檜が一本植えられている。もとは堤防の川側にあったが、河川改修により現在の場所に移転したと云われる。祠本体は御影石で移転前のものだが屋根、台座、玉垣は移転の際、コンクリートで造り替えられたものと思われる。現在の大京原橋は昭和49年（1974年）に完成したが、それ以前は上流約200m

の位置に潜水橋があり、さらにそれ以前は板橋や渡しで対岸の通称南大京原（那賀川町大京原の飛び地）とを結んでいた。対岸にも南大京原の水神社があることから、この水神さんは水上交通の安全を祈願したものと思われる。行事は特に行われていないが、注連縄を張り換えるなど地元の信仰は続いている。



写真－12 大京原の水神社

⑨赤池の水神さん

大京原橋から約 1.3 km 下流の堤防上（阿南市那賀川町赤池）にある。鳥居は木製で、脇にモチの木が植えられている。祠は瓦質であり、左右の外壁には上を向いた龍と下を向いた龍がそれぞれ描かれている。この下流 300 m 付近には近年まで対岸の那賀川町中島の飛び地（通称南中島）とを結ぶ渡しがあったことから、水上安全を祈願したものと考えられる。昭和 48 年（1973 年）、J R 牟岐線の鉄道橋（那賀川橋梁）に自歩道が添架されて渡しは廃止となった。水神社の行事は特に行われていないが、注連縄を取り替えるなど地元の信仰は続いている。



写真－13 赤池の水神社

2 那賀川南岸堤防

①上中の水神社

那賀川橋の南詰め上流側（阿南市上中町南島）にある。水神社の祠は大きな岩の上に安置されていて、高さは 1.3 m もある立派な御影石である。鳥居は木製で額には彫刻が施されている。すぐ下流にはかつて北岸の羽ノ浦町とを結ぶ渡しがあり、対岸に古庄の水神さんがあることから、水上安全を祈願したものと思われる。この付近は河川改修により約 100 m 堤防を堤内側に移していることから、かつては河川内にあったのが現在の場所に移転したと考えられる。水神にはお供えものがあり、鳥居には注連縄がかかっていることから、地元住民の信仰が続いていることがわかる。



写真－14 上中の水神社

②下大野の水神社

県道 130 号大林津乃峰線（旧国道 55 号線）那賀川橋南詰から約 2.2 km 上流の堤防小段（阿南市下大野町渡り上り）にある。もとは約 300 m 下流にあった「ガマン堰」の取水口に祀られていたが、河川改修でガマン堰が締め切られた際、現在の場所に移転したといわれる。水神社は平成 3 年に地元有志が新築したものであるが、鳥居は古式豊かな木造である。整備された広い境内の奥には、銅板葺きの祠が安置されていて、祭神は「弥都波能賣神」である。この祠は那賀川の方でなく、かつてガマン堰があった東の方（下流側）を向いている。

ガマン堰というのは、かつて那賀川の派川であった岡川へ洪水を分流させるため、明治 2 年（1869 年）に築造された石張りの越流堰である。対岸の羽ノ浦町の資産集積地帯を守るとともに、岡川流域の農地を小洪水から守り、大洪水は一部を越流させるのを目的としていた。しかし、洪水はしばしば堰を乗り越えて岡川で氾濫して田畑を押し流し、堰をも壊した。その度に、沿川住民は「ガマン、ガマン」と慰め励まし合って復旧に汗を流した。その苦労への思いからガマン堰という名前がついたとされる。その当時の水神さんは岡川流域住民の安全と繁栄を願って建てられていたと伝わる。昭和 18 年（1943 年）、那賀川は改修工事によって川幅が広げられ、ガマン堰は本格的な堤防で締め切られた。



写真－15 下大野の水神社



写真－16 ガマン堰の締め切り跡

現在の水神さんが祀られている場所の川側には「八貫の渡し」の船着き場があった。古くは対岸の明見と下大野は陸続きで同じ村だったが、度重なる洪水で明見は那賀川本流によって切り離されてしまった。人々は渡しで往来するようになり、藩政時代には重要な路線となって、対岸の明見には水上安全の水神社が建てられた。地元では「八貫の水神社」と呼ばれ、流域住民の安全のみならず、舟運による水上安全も祈願したものである。

③野上神社

県道 22 号阿南勝浦線の持井橋から約 700 m 下流の堤防小段（阿南市中大野町大坪）にある。もとは現在の場所から 30 m ほど南にあった「黒土手」という旧堤防の中腹にまつられていて、堤防の守り神であった。

江戸時代の後半になると那賀川でも徐々に堤防が造られるようになり、北岸側の万代堤に対し南岸側には延長 100 間（約 1800 m）の「黒土手」と呼ばれる堤防が造られた。当

時は堤防といっても幅や高さは現在の半分程度で、洪水のたびに決壊して被害をもたらし、特に元禄 13 年（1700 年）の大洪水では近くの神宮寺のお堂や人家などが多く流されたらしい。困り果てた南岸側の村人は人柱を立てることにした。人柱は女性でないと効果がないということで、村中にお触れを出したが誰も嫌がって決まらなかった。そこで、朝一番に堤防を通った女の人を人柱にすることにした。ある日のこと、何も知らない女のお遍路さんが通りかかったので村ぐるみで説得し人柱になってもらった。その後、度重なる洪水でも黒土手は切れなかったと伝わっている。



写真－ 17 野上神社の祠



写真－ 18 黒土手跡と南岸用水

近年になって黒土手の北側に新たな堤防が建設され、黒土手はその役割を終えた。昭和 24 年（1949 年）、黒土手堤敷を利用して那賀川南岸用水の幹線水路を通すことになり、作業員がスコップで掘削していると土の中から人骨が出てきた。集まった人々は「昔から聞いていた人柱の話は本当だったんだ。」と言ひあい、その人骨を丁寧に祀り犠牲者の冥福を祈ったのが野上神社である。地元民からは「野上さん」と親しみある愛称で呼ばれ、足腰や肩などの痛みを治してくれる神様として伝わっている。野上神社の例祭は毎年 5 月 5 日の子供の日に行われている。

神社は堤防法面に植えられた木々の中にあり、石積土台の上に瓦質の祠が安置されている。ほとんどの水神さんは那賀川に向かって鎮座しているが、野上神社は堤内側にあった黒土手（南の方）に向かって鎮座している。鳥居は木造で老朽化しており、正面にあたる堤内側からの参拝路はない。神社背面の堤防小段には野上神社の標柱やベンチが整備されていて、参拝者は裏側から出入りしている。



写真－ 19 野上神社

④上大野（通称清松）の水神社

持井橋から約 500 m 上流で堤防が山付きする地点（阿南市上大野町成国と西谷の境界）の堤防法面下にある。昭和 25 年に南岸用水が完成するまでは、ここに旧大野用水（一の堰掛かり）の取水口があった。水神さんは取水口跡の真上に建てられていて、水神さんの

先には用水が残っている。また、1973年（昭和48年）まで水神さんの約300m下流には持井の渡しがあった。那賀川の流れが北向きから東向きへとカーブして緩やかになる場所で、筏や川船の碇泊地でもあった。そのため、水神さんはかんがい用水の確保や水上安全の守護神として古くから祀られていたといわれる。

水神社は桜の木々に囲まれた中にあり、祠は瓦質で右面には竹、左面には松の絵が描かれている。これは明見や赤池の水神社と同じ形式である。鳥居は木製で玉垣はブロック塀であるが、敷地はしっかりした石積みである。鳥居や祠には注連縄や御幣が飾られ、地元民から崇拜されている。



写真－20 上大野の水神社

⑤久留米田の水神さん

那賀川南岸用水の取水堰から久留米田堤防を上流に向かって進むと堤防は山付きとなる。そこに南岸用水の取水口ゲート（阿南市上大野町久留米田）があり、すぐ手前の岩の上に水神さんがある。昭和25年、県営事業により南岸用水の工事が完成した際、用水の守護神として建てられたもので、堤内の用水に向かって安置されている。祠は御影石で玉垣はコンクリートブロック造り、鳥居は木製で朱塗りである。向かって右には、南岸用水の完成を記念し「那賀川南岸用水碑」と書かれた石碑が建てられている。



写真－21 久留米田の水神社

⑥柳島小田（通称）の水神社

那賀川橋から下流約900mの堤防の法面下（阿南市柳島町北別当と上中町中原の境界）にあり、約100m下流には阿南工業用水の取水塔がある。木々に囲まれた境内の奥には、石積みの土台に銅板で葺いた祠が東（下流側）を向いて鎮座している。鳥居の代わりに石門があり、手洗い鉢が置かれている。水との関わりは不詳だが、子供の守護神と云われ、かつては名前を書いた提灯が奉納され、8月16日にはカラオケ大会も行われていたらしい。



写真－22 柳島小田の水神社

⑦柳島伊月（通称）の水神社

大京原橋の約 1 km 上流（阿南市柳島町六反地）の堤防上にある。目の前には工業用水を取水するために建設された潮止め堰（通称イコス堰）がある。御影石の鳥居と石造りの玉垣の中には、水神の祠と並んで不動尊が祀られている。敷地の脇には大きな手洗鉢が置かれ、昭和 45 年と刻まれている。鳥居は平成元年に新調されたものである。かつて那賀川の南岸側堤防は、資産が集積していた北岸側に比べて整備が遅れて



写真－23 柳島伊月の水神社

いた。そのため、洪水安全を祈願したものであったが、その後、工業用水が取水されるようになり、水利利用の確保も併せて祈願していると考えられる。社殿には花やお供え物も多く飾られており、地元住民の信仰が厚いことがうかがえる。

⑧南大京原（通称）の水神社

大京原橋の約 100 m 上流（阿南市那賀川町大京原）の堤防上にある。大京原是那賀川によって地区が南北に分断されていて、南岸側は南大京原（通称）とも呼ばれている。水神さんは、もとは現在の場所から南東約 400m にある青龍神社の境内にあったが、昭和 40 年に現在の場所に移転している。両脇には桜の大木が植えられていて、鳥居は平成 17 年に御影石で新調されている。南北両地区の往来方法は、昔は渡しや



写真－24 南大京原の水神社

板橋であったが、その後、潜水橋になり、現在の大京原橋へと変遷している。水神さんがここに移転した頃は、正面に潜水橋があつて、出水時に渡ろうとして流される人もいたことから、水上安全を願ったものと考えられる。祠には注連縄が飾られており、地元住民の信仰が続いていることがわかる。

⑨横見（通称^{えんじぼり}円地畷）の水神社

大京原橋から約 500 m 下流（阿南市横見町上畷）の堤防小段にある。水神さんはごく最近まで堤防天端の川側にあつた。脇にはご神木があつて遠くからもよく見え、通行する人の目印となっていた。しかし、2004 年（平成 16 年）の台風 16 号によりご神木が倒れ、社殿自体も通行の支障になっていたため、平成 17 年、地元有志によって現在の場所に移転したものである。



写真－25 横見の水神社

玉垣に「^{いづくしま}巖島神社」と彫ってあり水神さんであるにもかかわらず、地元氏は「弁天さん」と呼んで親しんでいる。水神さんと弁財天と一緒に祀られているのであろう。かつて横見の堤防は河川改修以前に決壊があったと伝わっており、水神さんは洪水から堤防を守ることを祈願したものと考えられる。かつて水神さんの祠は堤内側を向いていたが、現在は下流側（東側）を向いて建てられている。

⑩辰巳の水神社

国道 55 号新那賀川橋から約 400 m 下流（阿南市辰巳町）にあり、那賀川で最下流に位置する水神社である。辰巳は那賀川の河口にできた中州であったが、江戸時代後期から新田開発が行われてきた。度重なる水害や津波など災害を受けたため、明治時代になってもその開発は続けられていた。1970 年（昭和 45 年）頃、工業開発のために地区全体の移転が行われ、現在は県内有数の工業団地として発展している。



写真－ 26 辰巳の水神社

もともとの水神さんは、洪水で上流から流れ着いたものをお祀りしたのが始まりといわれ、現在の場所から約 200 m 下流に安置されていた。その後、工業団地として全島買い上げがなされた際、現在の場所に移転している。数ある那賀川沿いの水神社のなかで最も広い境内を有している。祠は 2 つあっていずれももとの場所である東の方（下流側）を向いている。毎年、夏と秋の 2 回、境内に元住民が集まってお祀りをしている。

3 考察

那賀川下流域における洪水氾濫の安全、かんがい用水の安定的な確保、渡しや筏など水上安全などを祈願し、地域住民に信仰されてきたのが水神社である。今回の調査で那賀川下流の堤防上には北岸側で 9 社、南岸側で 10 社の計 19 社が確認できた。河口からわずか 13 km 間の堤防上にこれだけ数多くの水神さんが祀られているのは驚きであった。また、北岸側の水神は全て那賀川に向いて建てられているが、南岸側では那賀川に向いているのが 3 社、下流（東）を向いているのが 5 社、堤内側を向いているのが 2 社とばらつきがあった。水神社が移転した際、敷地や参拝の都合で方角を変えたケースもあったようだ。洪水で水神社が流れ着いたので、そのままそこで祀るようになった、という話も耳にした。よそで祀られていた水神さんであっても決して粗末にせず、水の流れに乗ってお越し頂いたので有り難くお祀りした、ということであろう。人々がいかに洪水氾濫を恐れ、かんがい用水の確保や水上交通の安全などを願っていたかがよくわかる。毎年 8 月 16 日は水神さんの祭日といわれ、注連縄が取り替えられてお供えやお祀りもされている。いずれの水神社も河川や地域を見守り、沿川住民の生活と深くつながっていたことが見て取れる。

しかし、高齢化や若者の無関心により、各地で水神社をお守りする人が減少しているの

は少々寂しい。那賀川の堤防は国直轄管理によって整備され、国営事業によってかんがい用水が再整備され、河川をまたぐ橋梁も数多く整備されて、安全性や利便性は飛躍的に向上したが、逆に沿川住民の水に対する危機意識やありがたさは薄れているように感じる。明治 29 年に河川法が成立し、国や都道府県が河川を管理するようになる以前は農民が河川を管理しており、当時の人々は堤防に植栽をしていた。木は根を張り堤防の強化になるとともに水防資材にもなった。洪水が堤防を越えたときは水の勢いを弱め、堤防の流失防止にも役立った。水神社を堤防上に設けるのは、そこでお祭りをすると集まった人々が踏み固めて堤防がより強くなるという意味もあった。水を人間の力で押さえるハードだけでなくソフト対策を組み合わせ、自然とともに生きようという治水の知恵であろう。ところが、現在は堤防上に新たに水神社をお祀りすることは無論のこと、植樹や堤天の一般車両通行も禁止されるなど、全く逆の考え方で管理されている。水神社がどこに、なぜあったのかも忘れ去られようとしている。水神社は単に願いをかけるだけでなく、洪水時には破堤の恐れがある注意すべき箇所でもあり、今一度、水に対する認識を高める必要があると考える。令和元年 10 月の台風 19 号による記録的降雨により、東日本では国直轄管理の阿武隈川や千曲川など 7 河川で 12 箇所も堤防が決壊するという前代未聞の氾濫被害が発生したことは記憶に生々しい。富山県の黒部川にある水神碑は、6 基すべてが堤防の決壊場所を示し、水害を後世に伝える役目を果たしていると云われる。水神社が語っているのは、単なるノスタルジーではなく、洪水や渇水などの水利用に警鐘を鳴らし続けていることに人々は気づくべきである。 以上

参考文献

那賀川歴史文化紀行ガイドブック 国土交通省那賀川工事事務所
那賀川を遊ぼう 徳島県県土整備部河川総合調整チーム
ふるさと阿南（文化と観光） 阿南市教育委員会
阿波学会研究紀要 郷土研究発表会第 31 号羽ノ浦の用水と水神信仰 喜多 弘
羽ノ浦町史地域編 羽ノ浦町
会報「河川文化」第 88 号 日本河川協会
国土交通省那賀川河川事務所 FLOW2019
那賀川への想い 那賀川北岸土地改良区理事長 岩佐俊雄